

コーヒーブレイク



第82回全国高等学校野球選手権大会 2000年8月15日 PL学園対明德義塾
PL学園の朝井選手がホームランを打った瞬間。球審が筆者(顔の分からないところがいい)

マスク越しに見た青春

会員

清水 幹裕 < 27期 >

1966年、卒業と同時に東京六大学野球の審判を始め、以来、妻子の迷惑も顧みず現在に至っている。のみならず、(妻に言わせると)病高じて、社会人野球、甲子園の高校野球にも携わることとなった。

この40年間のうちには、清原選手(PL学園-西武)、松井選手(星陵-巨人)などの豪打や、江川投手(作新学院-法政-巨人)、松坂投手(横浜-西武)の快速球を特等席で見るといふ楽しみもあった。

しかし、アマチュア野球審判の一番の醍醐味は、感動する場面にあえることだと思う。夢中になって戦う選手の息遣いを聞きながら、真剣に生きることの素晴らしさを実感できることが嬉しい。

いくつかのエピソードをご紹介します。

4年間1度も出場できなかった早大の4年生が、学生最後の試合「早慶戦」で初めてバッテリーボックスに立ち、震えながら振ったバットに当たった打球が内野安打になった。彼は1塁ベースに立つと、突然号泣しだした。はじめは何事かと思ったが、すぐに感激の涙であることが分かり、こちらも胸が熱くなった。

夏の甲子園の決勝戦。大阪桐蔭対沖縄水産の試合も印象に残っている1つだ。結果は13対8で大阪桐蔭が勝って優勝したのだが、試合終了の挨拶をした時、沖水のキャプテンが相手選手に向かって「おめでとう」と声をかけた。おざなりでなく、満面の笑みをうかべて、心から優勝を祝福しているのが、ありありと感じられた。

大勝負に負けた直後の18歳の少年のこの爽やかさは、どこから来たのだろうか。

その大会、沖水は1人の投手が全試合を投げ抜き、全投球数は800球に近く、決勝戦の投球など、私でも打てるのではないかと思うほどのものだったが、彼はマウンド上でも苦しそうな態度を全く見せず、力の限り投げ続けた(決勝戦終了後、疲労骨折していたことが分かった)。キャプテンにそれが通じないはずはない。自分達のした事に対する満足感と誇りが、大旗を逃した悔しさを超えたのだろう。

人は、自分のした事に満足し誇りを持った時、初めて相手の成功を讃えることができる。高校生に身をもって教えてもらった。

昨年の夏も、すごい決勝戦だった。甲子園の審判は2000年で引退したので、テレビで観戦していたのだが、37年ぶりの引き分け再試合の末、早稲田実業が駒大苫小牧の3連覇を阻んで優勝した。早実の選手の笑顔もよかったが、負けた駒大の選手の表情も実に清々しかった。こうした若者がいる限り、日本の将来は明るいと思える。

ところで、早実の“ハンカチ王子”こと斎藤投手は、早稲田大学でプレーすることがほぼ確実だ。神宮球場で彼の審判が出来るかもしれない。江川君や松坂君と比べてどうだろうか。

神宮に通う楽しみが、また1つ増えた。